

この度、「寺院しおり」をPDFデータにて掲載させて頂くこととなりました。

このしおりは、寺院様のご協力を得て寺院の成立から今日迄の歴史を探り、又、寺院の景観、本尊、諸仏像、什物を一冊の本にまとめたものです。

この「寺院しおり」は寺院様のご協力により**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィスが製作しております。

お寺の歴史は地域の歴史と密接に関わり、その土地や歴史を知る大変貴重な資料であるという思いから皆様にもご覧いただけるよう公開させていただくこととしました。

スキャンによる作業を行ったため、必要な箇所をお読みいただくに際し、少々取り扱いにくいものもございますが、何卒ご了承下さい。多少なりともお役に立てていただければ幸いです。

※ PDF ファイルのリンク先はネットワークの状況により予告なく変更する場合があります。誠に申し訳ございませんがPDF ファイルへの直接リンクはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。

また、著作権等は放棄しておりませんので、掲載されている文章・写真の無断使用・転載などはご遠慮願います。

この「寺院しおり」PDF データは「**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィス」並びに「**いい寺.jp**」のホームページで掲載されております。

(有)光陽フォト・オフィス <http://coyo.jp>

寺院情報サイト**いい寺.jp** <http://e-tera.jp>



東北寺院の総合情報サイト

www.e-tera.jp **いい寺.jp**

曹洞宗
そうとうしゅう

鶏頭山
けいとうさん

光西寺
こうさいじ

狐禅寺の地

水をめぐって

一関より磐井川に沿って三キロ。北上川との合流点が狐禅寺地域である。この一円は平泉の秀衡、義経の伝説で満ちている。

近年、昭和二十二、二十三、二十四年のカスリン台風、アイオン台風、キティ台風では一関、特に狐禅寺では、北上川と磐井川の増水がすさまじく、水位一六m八九cmを記録し、それらの台風は県内で一〇〇〇人にもものぼる死者、負傷者、行方不明者を出すなど多くの爪跡を残した。それらは古から「白髯の洪水」といわれ、神のいかりや悪霊のしわざといわれ、濁流

権をめぐる争い（狐禅寺騒動）がこの地で繰り広げられている。

古から盛岡と黒沢尻間は小繰船、黒沢尻と石巻間は縹、下りは半日、上りは四日。明和元年（一七六四）には盛岡八隻・郡山（日詰）一〇隻・花巻一二隻・黒沢尻一四隻計四四隻が長さ一四mの船で米俵三五〇俵を積み、石巻からさらに太平洋を江戸、大阪にまで運んだ。そのための一関中継として渡し場があったが明治初期には新たに渡船場が設けられ、狐禅寺河岸として宮城県石巻市との間に蒸気船岩手丸と登米丸、宮城丸（四五t）が就航し大正時代まで続けられた。千歳橋が架けられたが洪水ですぐ流され、昭和二十六年、窮余の一策としてモグリ橋（水没することを前提にした橋）を架設したが、年間百日もモグリ続けたため近年高架橋をやっと完成、北上川・磐井川合流地一帯に遊水地を設けるなどまだまだ水との関係は深まりそうな狐禅寺地域である。

の中に白髪の老人がいかだを操っているのが目撃

されたり白髯の老人から「水が出るから逃げろ」と予告されたりした、ともいう。この地方の家屋の軒下には小船がつるされているのが常であった。水との関りが欠かせない狐禅寺地域である。

陰に陽に入々は水を考え、利水を願っていた。

天正九年（一五八一）七月同じ葛西臣下の、下黒沢（一関市）城主黒沢豊前守と東山長部中館（平泉町）城主長部孫八郎との北上川の水上



桜の参道



参道

昔、秀衡公の時代、平泉の塩沢という所に化け狐が出没し、にわかには橋に化け、通る者を流れにおとした。橋を弓で射たところ橋から狐が現われ、把らえて身切りにし北上川に流し漂着した所が大明舞台（大名婦）屋敷と呼ばれ、その狐がさらに怨霊と化し、祟り、人々を悩ませた。ある時は秀衡公に化け、城の中に入り常夜灯を消したりしたという。秀衡公は僧侶たちを呼び占わせたところ狐の生化という卦が出、狐の霊をはずめ、改めて生首を埋め戻し、首塚を築いた。塚の前に大明舞稻荷大明神（現青竹稲荷神社）を祀り白馬山狐禅寺（当寺の前身）を建て別当寺としたという。事実であれば秀衡公開基の寺ということになる。

水の怒りが解けている時は実にのどかな田園地帯が広がり、昔、気仙地方の菅原某中納言が京都の景色に似ているとしてこの地方一円を大原、小原、西山、東山、八瀬、奥の葉山と地名

天台宗の流れ

狐禅寺が曹洞宗鶏頭山光西寺となり再興される永享十年（一四三八）以前は天台宗であったという。その年月は全く不明であるが、秀衡他界後は住職も絶え、虚堂と化していた。

・延暦二〇年（八〇一）坂上田村麻呂が征夷大將軍となり、聖武天皇の命により蝦夷の阿弼流為らを制圧する。

・延暦二三年（八〇四）最澄が中国（唐）より戻り天台宗、比叡山延暦寺を開山する。弟子の慈覚大師が桓武天皇の勅願で東国に天台宗を広め始める（八四八）。

・嘉祥三年（八五〇）慈覚大師（円仁）、平泉中尊寺、毛越寺、天台寺、松島の瑞巖寺、青森



山門の仁王（伝）



山門

を名付けた、ともいい、歌人の猿丸大夫もこの出身者であり、舞台屋敷では秀衡と義経が猿楽（古代、中世の能、狂言）に興じた。舞台桜とその地名や猿沢の名も今なお残っている。

山門の仁王（阿）



恐山等を天台宗の寺院として開山する。

・康平五年（一〇六二）江刺郡豊田館の主、藤原経清と奥六郡の長安倍貞任らが前九年の役で敗れる。経清の子、清衡が秋田にのがれる。貞任の弟とされる境講師官照は天台寺の住職を勤めていた。

・寛治三年（一〇八九）藤原清衡、後三年の役に勝利し、父経清の遺城、江刺の豊田館に入る。
・長治二年（一一〇五）より藤原清衡が平泉に天台宗の寺院を次々と建立する。

このことから、東国における天台宗は安倍一族と藤原一族の庇護の下に興隆をたどっていたと思われ、平泉の寺領であった狐禅寺の天台宗時代はその中に存在した。

文治五年（一一八九）源頼朝は平泉百年の文化を滅ぼした。関東御家人として功あつた葛西三郎清重に頼朝は奥州総奉行として、江差郡、

伊沢郡、気仙郡、元良郡、岩井郡、それに現在の東磐井郡の奥田保、黄海田保の領地を与えた。これは近世の石高にして三十〜三十五万石に相当する大名クラスである。

額号寺
覇権は失つたものの磐井地方は平泉の文化圏にあった。

鎌倉武士支配の時代から、中央政権の混乱のままに翻弄された南北朝、室町時代、平泉では天台宗の寺院が真言宗、曹洞



光西寺の開山



本堂正面

宗に次々に転宗する一方、北朝方による関東管領をうけて奥州を司る奥州探題が置かれ、葛西もそれに組するが関東の武士等が入り乱れることにもなる。

そして狐禅寺城の古塁は葛西家臣新柵太郎左衛門種次居城とされるが再開基にどのように関わっていたかは不明である。天正の頃は舞草館の、水沢城主の末といわれ、葛西十六騎のうちの佐々木佐衛門四郎綱利の領地であった。天正十八年（一五九〇）葛西が清重以来十七代の晴信迄四〇〇年間の治政が滅亡して光西寺は伊達領の中で法燈を灯し続けることになる。

ちなみに江戸期のはじめは仙台藩領直轄、万治三年（一六六〇）一関藩領（伊達兵部領）、寛文十一年（一六七二）仙台藩領、天和二年（一六八二）から一関藩（田村藩）、明治以降は一関県、水沢県、磐井県を経て明治九年から岩手県下となる。明治十二年から二十二年迄は西磐井郡真滝村、以後一関市の大字となる。

御開山のこと

「鶏頭山光西寺、曹洞宗、本郡（岩井郡）一関邑（一関市）願成寺末寺、伝え云う、古昔藤原秀衡堂宇造営、回祿の後、後花園帝の永享十年（一四三八）八月二十八日、願成寺（奥の正法寺表五ヶ院の一寺である）第二世梵西和尚中興開山」と安永風土記にある。風土記は仙台藩で領内の各村から提出させた書出で一七七三〜九年にまとめられた。正法寺末願成寺二世来用梵西和尚が七十七歳にして開堂法演の儀を挙げ、この時に鶏頭山光西寺とし、曹洞宗に改宗した。

月泉良印禅師の第九資梅榮元香大和尚が白馬山願成寺を応永二十二年（一四一五）開山し、正法寺輪住八代を勤め後、梅榮元香大和尚の資、来用梵西大和尚が師の後住として願成寺二世となつてゐる。それ以前に、正法寺輪住三十代を勤めていた。嘉吉二年九月二十七日八十三歳にして遷化している。

薬師堂の本尊は薬師如来尊像だが慈覚大師（円仁）作と伝えられる阿弥陀如来尊像もある。

奥の正法寺の開祖無底良詔禪師は二十二歳の時、石川県能登にある永光寺で明峯素哲禪師について出家得度され三十一歳にして総持寺二祖峨山紹碩禪師の法を嗣がれた。明峯・峨山両禪師はともに大本山総持寺開山の瑩山紹瑾禪師の高弟である。一寺建立の大願を興し、紀州熊野権現の不思議な夢に逢い、東北地方を行脚し、天台宗黒石寺の跡に立たれた時、山深く谷静かなこの地こそ修行に最良と感じられた。無底禪師三十四歳、貞和四年（一三四八）四月五日のことであった。当時、この地は、黒石越後守正端（黒石鶴城館主）と長部近江守清長（長島長部館主・平泉町）の二人の領地にまたがっていた。二領主はともに無底禪師に帰依し寺領を寄進し、伽藍を建立し、ここに東北最初の禅道場『大梅拈華山圓通正法寺』が現出したのである。時に貞和四年（一三四八）八月二十二日、無底禪師は正法寺開祖となった。



本堂内陣



本堂内部

総持寺二祖峨山禪師の二十五哲中一番弟子の無底禪師が開祖。そして十三番弟子の月泉良印禪師が正法寺第二祖。さらに十六哲目の道叟道愛禪師が第三祖。以後、月泉良印禪師の法嗣により受け継がれる。

道叟道愛禪師はのちに胆沢郡で永徳寺を草創することになる。

正法寺は、開創の観応元年（一三五〇）から二五五年間奥羽両国の本寺、紫衣出世道場として永平寺、総持寺とともに第三の本山の格式をもっていた。当時の崇光天皇ほか三人の天皇より御給旨の文が寄せられている。末寺は五〇八とも一二〇〇寺とも伝えられる。しかし、元和元年（一六一五）徳川家康が寺院に統制を加えるために法度を制定した。正法寺も本山総持寺の直末になり、道叟禪師の胆沢永徳寺派は門葉約四〇八ヶ寺で離末転派の最大の寺門であった。月泉良印禪師の法嗣の寺も同様、離末転派が多数あり、残念なことであった。



山号額「鶏頭山」

白馬山狐禅寺、白馬山願成寺、鶏頭山光西寺と並べて見るがこの地方に山号に合致する山は見あたらない。南部藩最北の地に天台宗であつた下北半島、むつ市に恐山おそりがある。慈覚大師が中国で修行中に京都の東方三〇余日の所に靈山ありとのおつげを聞き、地藏菩薩を作つた。高野山、比叡山と共に三大靈山とし、恐山菩提寺とした。蓮華八葉の山が宇會利湖を囲む。湖のほとり、恐山の広い境内には三途の川、極楽浜、地獄谷、賽の河原、血の海など水と関係しおどろおどろした名称が並んでいる。今はイタコの口寄せと金の埋蔵量の可能性で知られるが、蓮華八葉の



薬師堂



薬師如来像



春の中庭



御開山

山に鶏頭山がある。五百年以上の昔、平泉の霊を知り、南北朝の動乱と天正の悲劇を知った人々が、水、黄金、天台宗、慈覚大師らの、あまりにも相似するものを知り、八葉山より鶏頭山の山号を名付けたのではないだろうか。

寺宝・諸仏など

- ・ 薬師如来
- ・ 阿弥陀仏
- ・ 聖観世音菩薩像

当寺は西磐井三十三観音の十六番札所で、
聖観音様は金色の光背の前に立ち優しく素



聖観音像

朴な姿を感じさせる。

〔御詠歌〕

もろともに 願ふ心の 数そへば
光りは西に むらさきの雲

- ・ 大日如来尊像
- ・ 地藏菩薩像
- ・ 水没者供養塔
- ・ その他諸仏・諸軸など



大日如来像



天蓋絵「龍」



梵鐘



不動明王像



薬師如来立像

仏教について

仏教は今から二千五百数十年ほど以前に開かれた、人生の苦悩からの解脱を教えることを旨とし、現実の生活を意義あるものとして、希望をもって行く道を説く宗教です。

この仏教は釈尊によって唱えられました。

釈尊は正しくは釈迦牟尼世尊のことで、釈迦は出身のシヤカ族、牟尼はサンスクリット語で聖者、世尊は世に尊敬される福德者の意味です。その外に仏陀、仏とも言われますが悟りを



涅槃図



出山之図

開いた人、人生の苦に目覚めた人の意味です。又、亡くなった方をホトケ様というのは、民衆信仰の思い入れが込められ変化した表現です。仏教とは、自らの修行によって真理を目指すものです。

- 一、人生苦に関する真理
 - 一、苦の原因に関する真理
 - 一、苦が滅した理想（涅槃）に関する真理
 - 一、涅槃に至るための八種の実践に関する真理
 - 八正道 ①正しい見解 ②正しい決意
 - ③正しい言語行為 ④正しい身体的行為
 - ⑤正しい生活 ⑥正しい努力 ⑦正しい記憶 ⑧坐禅による正しい精神集中
- これらが仏教の基本です。



庭と無縁仏

曹洞宗について

光西寺は曹洞宗（禅宗）のお寺です。

禅宗とは釈尊のその教えを坐禅という修行によって自己を律しながら学ぶという方法で達磨大師らによって広められました。

そのお弟子さまに洞山禅師と曹山禅師がおり、二人の名前をいただき曹洞とし、鎌倉時代に中国（宋）に留学し禅を学んだのが道元禅師です。帰国後、大本山永平寺を建立し修行に専念し、『正法眼蔵』などの著述を遺し高祖大師と呼ばれます。瑩山禅師はその教えを広く日本中に布教し、大本山總持寺を開山し太祖大師と呼ばれます。

曹洞宗では釈尊とお二人を一仏兩祖とし敬虔な信心の日常を送ることを旨としております。

現任職 光西寺第二十八世 本田 達雄

〒〇二九〇一三二

岩手県一関市狐禅寺字田谷下九四

電話（〇一九二）二三四七四九

FAX（〇一九二）二三一五七四九

